

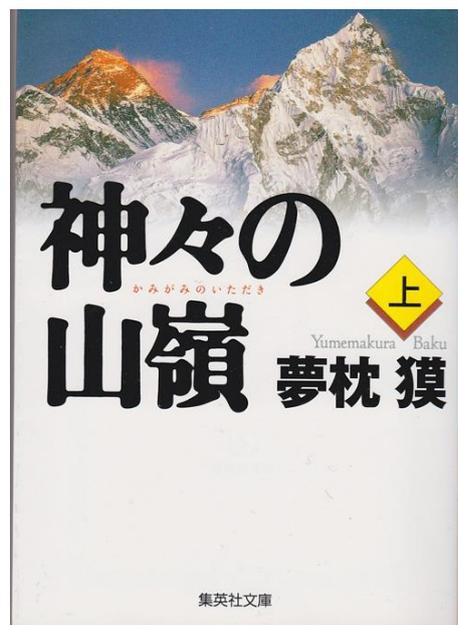
## 夢枕獏著「神々の山嶺」と映画「エヴェレスト」の紹介

藤井 諭

### 【概要】

カトマンズの裏街でカメラマン・深町誠は古いコダックカメラを手に入れる。そのカメラはジョージ・マロリーがエベレスト初登頂に成功したかどうか、という登攀史上最大の謎を解く可能性を秘めていた。カメラの過去を追って、深町はその男と出会う。その羽生丈二は伝説の孤高の単独登攀者。そして死なせたパートナーへの罪悪感に苦しむ男。羽生が目指しているのは、前人未踏のエヴェレスト南西壁冬季無酸素登攀だった。生物の存在を許さぬ8000メートルを越える高所での吐息も凍る登攀が開始される。人はなぜ、山に登るのか？永遠のテーマにいま答えが提示される。

この本がついに映画化され、この3月12日から公開される。松江ではサティ東宝で上映される。この本のファンにとっては、わくわくするニュースである。キャストは羽生を阿部寛、深町を岡田准一とイメージは近いが、涼子役はどうか？天才クライマー長谷は誰が演じられるのか？映画が原作を表現しきれぬのか不安もある。上の表紙の原作（文庫本上下で1047ページの大作）を紹介をしたいのだが、私の文章力では十分に伝える自信がない。既に原作を読まれた会員も多いだろう。ここではまだ読まれたことのない方のために、独断と偏見で原文のポイントを抜粋して紹介しておきたい。



この物語の発端は次の一節にある。マロリーがエヴェレストの初登頂者ではなかったのか？その明確な証拠が存在する！

### 【内容のポイントと感想】

この物語の発端は次の一節にある。マロリーがエヴェレストの初登頂者ではなかったのか？その明確な証拠が存在する！

1924年の頂上アタックの際に、マロリーは、隊員のサマヴェルから借りた、コダックの、折り畳み式のカメラを持っていっているのである。ブローニフィルムを使用するこのコダック製のカメラは、遠征が行われたその1924年に発売された、最新鋭機である。ここに間違いなく言えることがひとつある。それは、もし、マロリーがエヴェレストの頂上に立ったとしたなら、必ず、このカメラによって撮影されているはずであるということだ。マロリーの屍体が、エヴェレストのどこにあるにしろ、その屍体が背負っているザックの中には、このコダック社のカメラが入っている。そして、そのカメラの中に入っているフィルムは、いまだに現像が可能なのだ。

羽生丈二は後輩の岸文太郎を連れて北穂の滝谷に挑む。その途中で確保に回っていた岸が、足元の岩が崩れて落ちた。登攀中だった羽生も引きずられて落ちたが、自力で這い上がり岸の確保に回った。しかし岸には這い上がる余力もなく、二人共動けないまま時間だけが過ぎた。岸の声がだんだん弱くなった頃、ついにザイルが切れて岸は遥下に落ちていった。羽生は生還したが故意に切ったと疑われ、その暗い過去を引きずってネパールに住み着くことになる。そして問題のカメラの一節が出てくる。

1992年の夏に、チベット側から、羽生はエヴェレストに入り、無酸素で、頂上を踏んでいる。単独ではない。この時には、5700メートルの高さまで、アン・ツエリンが同行している。羽生の目標はあくまでも、冬季のエヴェレスト南西壁を、無酸素、単独でやることにある。そのとおりのエヴェレスト行きは、エヴェレストの高さにおいて、無酸素で行動した時、自分の精神や肉体がどういうことになるかを確認するためのものだ。

「その時に、ビカール・サンは例のカメラを手に入れたのです」「カメラ...マロリーのですか？」「ええ」「どういう状況だったんですか？」「8100メートルあたりだったらしい。そこで、白人の屍体を見つけたと、ビカール・サンは言っていましたよ」「8100」それは、長谷川良典によれば、王洪宝が、白人の屍体を見たとき報告した高度である。大きな岩の陰に、隠れるようにその白

人は寝ており、服に触れると、服はぼろぼろと崩れたという。詳しい位置を言う前に、王洪宝は、雪崩に巻き込まれて死に、その件については、そのままになっている。王洪宝が見、長谷川良典に語ったその白人の屍体が、マロリーの屍体だったのではないかと言われている。その現場へ、羽生もたどりついたというのか。

「そのザックの中からは、カメラを持ってきたんですよ」

ここで出るビカール・サンとは現地で羽生の呼ばれている名前。ネパール語で“毒蛇”を意味する。そして羽生に魅せられカメラマンの深町は、この本のテーマにもなっていることを問いかける。

何故、山にゆくのか。何故、山に登るのか。それには、答えがない。それは、何故、人は生きるのかという問いと同じだからだ。もし、それに答えられる人間がいるとするなら、それは、何故人は生きるのかという問いに答えられる人間である。

狂おしい。自分の身体の中にある狂おしいもののために、人は、山に登るのである。何故、山に登るのかという問いの答えを拒否するように、人は山に登る。頂きに、答えはない。頂は、答えはない。頂を踏んだ瞬間に、天井に妙なる音楽が鳴り響き、しずしずと答えが天空よりもたらされるのではない。たぶん、おそらく、そんなことのために人は、山に登るのではないだろう。地上から、天上を仰ぎ見るような、切ない気持で雪の頂を見上げる。．．．あれは、頂が、まだ天上のものであるからだ。踏んだ瞬間に、頂は地上のものだ。人は、頂を踏んで、それからどちらの方向に向かって歩き出せばよいのか。わかるわけではない。わかるわけがないから、また、次の山に登ろうとするのだ。より困難な山に。．．．何故だろう。

羽生のエヴェレスト南西壁の冬季無酸素単独登攀がついに開始される。深町はその記録撮影を許可され、南西壁の途中まで同行しカメラを回した。そして頂上まであと250mあたりまで目で確認し、その最後の姿は雲の中に消えた。その5年後、深町はノースコルから無酸素でエヴェレストに挑み登頂する。その下山途中で衝撃的な出会いをする。最後の一節が、この物語の劇的な結末を表現している。

岩にたどりつき、風と雪を避けて、その岩陰に回り込む。そして、おれは、その岩陰で見たのだ。そこにうずくまっているふたつの人影を。．．．それはふたつの屍体であった。雪が、全身に付着して、白くなっている。凍りついている。ひとつは、古い屍体だ。しかし、崩れて、背骨が折れたように前に小さく身体がたたまれたようになっていて、大きさが半分近くになっている。何を着ているのか。近代的な、防寒具ではない。古い、ツイードの服らしきもの。その上に、大外套を着て、ウールのスカーフを首のあたりに巻いていた。横の岩の下から見えるのは、ピッケルの先だ。こんな格好で、山に登ったのは、1920年代。．．．それも英国人だろう。その瞬間に、ひとりの男の名が、頭に浮かんだ。G. マロリー。マロリーか？1924年6月8日12時15分に、オデルが、この北東稜で目撃したのが最後であった男。

そしてもうひとつの屍体。それは、新しかった。着ているのは、燃えるような、赤のウィンド・プルーフ・ジャケット。そして、その色を、おれは知っていた。カメラのファインダーの中で、最後に見た色だ。「羽生。．．．!？」思わず、声が出ていた。羽生丈二であった。三葉虫の化石のように、アンモナイトの化石のように、こんな高みに人の肉体がふたつ眠っている。ネパール側から登った羽生が、どうしてチベット側のこんな場所にいるのか。羽生は、風を防ぐように、自分のザックを腹に抱え、その上に顎をのせ、そして、顔をあげていた。しかも、なんと、眼を開いたまま死んでいたのである。眼球が凍りつき、顔のあちこちに、堅く雪がへばりついていて、羽生は、その眼を開き、前を睨むように見つめながら死んでいたのである。

しかし、どうして、こんな場所にいるのか。あり得ない。どうして、ルートを間違えたのか。どちらにしる、はっきりと言えることがあった。羽生は、エヴェレストの頂に立ったのだ。立ったからこそ、チベット側のこの場所に羽生がいるのである。やったのだな。あんたは、あの壁を越えて、あの、この地上で唯一無二の場所にたったのだな。“そうさ、立ったよ”と羽生が答えたような気がした。

羽生の生き様は強烈である。その強烈さが頭にこびり付いて離れない。その強烈さを深町のカメラを通して表現している。どんな映画になるか期待と不安が交錯する。